

近現代芸術論研究会

研究会概要

本研究会は、現代芸術・現代思想研究を背景とするメンバーによって近現代の芸術理論の文献講読と関連施設へのフィールド調査を通して、理解を深めるとともに、研究ネットワークを拡げること目的としている。本年はとりわけ「シュルレアリスム」思想の展開を、日本における理論的支柱と位置づけられる瀧口修造（1903~1979）を中心に追っていく。具体的には、瀧口の著作の読解と瀧口研究の整理を中心に隔週での輪読会を行った上で、各メンバーの研究対象と瀧口の思想あるいは「シュルレアリスム」との関係性を研究し、9月の公開研究会において発表、討論を実施する。さらに、瀧口の常設展が置かれている富山県美術館へのフィールド調査を行う。本活動を通じ、現代音楽研究、前衛・現代芸術研究、現代思想研究を専門にするそれぞれのメンバーの知見を総合し議論を行うことで、未だ不十分であるとみなされている瀧口の芸術性、芸術活動、創作の学術的評価に寄与することができる。同時に、瀧口の思想、ひいてはシュルレアリスムの実践は本研究会のメンバーの各対象とも密接に関わっており、各人の今後の研究成果発表において、本研究の成果のさらなる発展が期待される。



本研究会では、瀧口修造の思想研究書籍を軸にして、前衛芸術とシュルレアリスム思想の接続を取り扱った文献の輪読会を月2回実施し、担当メンバーが該当書籍等についてのレジュメを用意する。講読予定の文献は末尾に記載する。また、創始館303・304を使用して公開研究会を行う。そこでは、平芳幸浩氏（京都工芸繊維大学教授）をお招きし、メンバーの発表へのコメントを頂く予定である。富山県美術館の調査では学芸員に事前にアポイントを取り、コレクションについて質問させていただく。

メンバー

◎高畑和輝（Kazuki Takahata）表象領域2回生（代表：so0940fk@ed.ritsumei.ac.jp）

日本の現代音楽作曲家である、武満徹の1970年代後半以降の作品がもつ特有のテクスチャの分析、あるいは作品受容の研究。1980年代の作曲家の思想の展開を研究している。

大橋一輝（Kazuki Ohashi）共生領域1回生

現代日本の知的障害者の絵画制作を対象に、そこでのヒトとモノの相互作用に着目して、「障害」がどのように生みだされているのかを研究しています。

川名佑実（Yumi Kawana）表象領域3回生

前衛芸術家中西夏之の1960年代の創作実践の研究。

北村公人（Masato Kitamura）表象領域2回生

フランスの精神分析家であるジャック・ラカンにおける「喜劇」の研究。

藤本流位（Rui Fujimoto）表象領域5回生

2000年代以降の現代美術の作品、作家を事例に、出来事や状況の運営者としてのアーティストが生み出す暴力の表象を研究している。